子育てと家族の役割分担〈第3回〉

シングルファザー・シングルマザーの場合

浜　文子
詩人・エッセイスト

【はま ふみこ】出産・育児・教育・介護をテーマに取材・執筆・講演を行う。一貫して現場主義の視線で発信。著作物はNHKラジオ第2「私の本棚」でアンコール放送され、エッセイは高校入試国語科の問題に毎年使用されている。主著に「育母書」「祝・育児」「母になる旅」など他多数。

シングルで子どもを育てている親の方々に私が最も多く口に乗せるアドバイスは「子どものことを含め、仕事のことでも、個人的な内面の悩みでも、何でも相談できる友人や知人を大事に確保しておくこと」である。

金持ちであるより、物持ちであるよりも、大事なのが「人持ち」であること――これはシングルで親業に勤しんでいる方々に声を大にして申し上げておきたいことだ。

お金は無いより有るにこしたことはないが、それよりも何よりも人との繋がりをより多く持っていることが、子どもを育てている時には欠かせない大切な事柄だ。

一人で子どもを育てていることのデメリットは、子どものことを日常的に同じ目線で見つめ、話し合い、相談できる相手がいないということ。そして、その慢性的な緊張感といったものが、無意識のうちに心身共にストレスフルな状況を生むということ。そのことで子どもの側も親のストレスの反映で、日常的に心に平安を欠いてしまいかねないということ等々。（子どもは、とても健気に親の心を支えようと努力する。その結果、疲れ切ってしまうのだ。）

また、子どもの保育者であると同時に一家の働き手の役目も担っているシングルの親は、なんといっても子どもと過ごす時間が、圧倒的に少なくなりがちなので、できる限り物理的に「時間を有効に用いる」ことに頭を使うことを意識して欲しい。

私の接してきたあるシングルファザーの方の生き方や、暮らし振りを紹介しながら、前述のさまざまな問題の対処法を記してみたい。

率先して学校と地域へ出る

シングルファザーのA男さん。三九歳。関西に住む彼は工務店を経営している。子どもは三人。中三の娘、小六と小四の息子たちだ。彼が恵まれているのは、彼の実母が歩いて五分の所に一人暮らしをしていて健在なこと。

妻は五年前に彼に隠していた多額の借金が発覚したことから、関係がギクシャクし始め、ある夜大喧嘩をした後で家を出て行き、それっきり戻っていない。

当初は、うろたえた彼だったが、本来がマメな性格なのが幸いして、今は子どもの洋服にアイロンを当て、遠足の弁当も、とびきり上手に作る。妻が出て行った後の六ヶ月間だけは近所の母親に朝・夕の食事の仕度を頼んでいたが、今は全部自分でやっている。

子ども達も、実に素直にスクスクと育っている。子ども達はみんな父親が好きだ。何でも一生懸命にこなす姿を、ちゃんと評価し尊敬もしている。

彼の父親としての在り方はこうだ。小学校でも中学校でもＰＴＡ会長を引き受ける。それも率先して。必然的に学校の行事は全て把握している。そのため子ども達の周りの環境も、よくつかんでいる。

運営委員会や役員会などの集まりも欠かさずスケジュールに組み込み、母親達とも、よく世間話をする。その交わりの中で、つい偏りがちな男だけの視点に自ら反省をしてみたり、別の角度から物事を見るクセを身につけることが可能になったとの自己分析をしている。

カット・ケイスケ

彼が立派なのは、集まりの後や行事の後を利用して校長とも酒をくみ交わし、教員の全員とも交流し、同学年のよその子の生活を把握している。他との比較が冷静にできる分、子どもの言動に対して徒らにクヨクヨしたり、深刻になることがない。

三人の子どもの中で、上の二人は、反抗期の只中という年齢なのだが、父親に「学校に来るな」とか、「友達の手前、目立つのは恥ずかしいから役員は引き受けないで欲しい」とは言わない。それどころか、父親が学校で廃部寸前だった部活のために、他の親を巻きこみ奮闘したり、前向き、建設的に他者のために動く姿を客観的に、しっかり評価している。

そして、妻が居なくなって五年の間に「家族」としての会話が密になり、〝一つの組織的なまとまりができた〟と、これは父親自身の言葉を借りた「今の暮らしへの実感」だという。

他者を受け入れる風通しの良い家

父子家庭、母子家庭が滑らかに機能しているケースに特徴的なことは、大変に「家族の結束が強い」ということである。父、または母を中心にして、子どもたちの助け合う心、支え合う意識が、体の中にしっかりと据えられていると感じる。

このような家庭では、何よりも圧倒的にコミュニケーションの量が多い。どうということもない話を沢山交していて、家族のメンバーが何をどう考え、どのようなことに興味を持ち、今欲しがっているものは何か等々を互いに実に良く把握している。

最初に掲げたＰＴＡ会長の父親に象徴されることだが、ＰＴＡ活動とか地域の活動（各種のお祭り、バザー等々を含む）の場に積極的に関わることは父子、母子家庭の親にとって、生活に根ざした人脈がさまざまに広がる大きなキッカケ作りになる。そして、私がさらに提案したいのは、一人親家庭には、親のつき合っている友人関係にある人達が、より頻繁に家に出入りし、子ども達と食事を共にしたり色々な話を交したりする「他者の風通しの良い家」を意識して作ることである。

子ども達が育っていくときに、親以外の色々な大人の心の風景を知っておくことはとても大切なことなのだ。親には言いにくいことを打ち明けられる大人の存在が、長い子どもの人生の先に用意されていることは、親が子どもに渡すプレゼントの一つと言える。

特に父子家庭に育つ女の子には女性

カット・ケイスケ

の、母子家庭に育つ男の子には男性の、視点、感性がとても新鮮で魅力的に映り、その存在が、子どもの人格の成長にもたらす意味が、将来的にとても大きいということがある。

それは他人ではなくとも、例えば男親の姉妹とか女親の兄弟などの親類との関わりなどでも良いのだが、親類が遠方に住んでいて始終行き来できないというケースや、何かの事情で、ふだんの交流が途絶えているという場合なども、積極的に友人、知人の存在を風通し良く家庭内に取り込みたいものである。

その場合、親が特別に恋愛感情などを抱いている相手というのでなしに、〝心の通う、遠慮の無い友人関係〟にある色々なタイプの異性の大人とのつきあいがあれば、それが望ましいと思う。子どもの心のデリケートな部分に妙なこだわりを与えずに済む。もちろん、そのような関わりの中から親にとっての〝特別な相手〟が生じることは、とても良いことなのだが・・・・。

離婚後の親子の面会について

そして、ここが父子、母子家庭の最も大切な部分なのだが、離婚などで、子どもの父親、または母親と別れた場合、子どもと一方の親との面会、交流は、あくまでも「子どもが親に会うのを心待ちにし、楽しみにしていて」、加えて「もう一方の親の側も、子どもに会うのを生活の励みにしている」という場合を除き、無理に励行する必要は無いという気がしている。

誤解を招くような物言いは避けたいが、私の知っている数例を眺めても、子どもが一方の親の記憶があまり残っていないのに定期的に、〝周りの配慮〟や、もう一方の親の〝親心〟で、義務的に会うことの、子どもの心へのデメリットを考えてしまうことが多いからだ。子ども自身が会うことを渋ったり、あるいは、同居していない方の親の側が、子どもと面会することに積極的でない場合は、会った後で、やはり子どもの心に重いものが残る。

特に、わが子に格別の愛着も持たず、無関心だった親に、離婚後無理矢理子どもとの面会日を用意しても、突然に親心がかきたてられて、親子双方の面会日が楽しくなるという話は聞かない。多くは、会ったことで子どもが傷つき、そのことで同居している側の親もさらに傷つくことがある。悲しいことだが、「現実」である。

ただ、子どもにとっては別れた親が、どんな人だったのか、何を考え、人生にどう向き合っていたかをとても知りたがる年齢というものがあり、「お父さんに会いたい」とか「お母さんに会ってみたい」という心が高まる年齢がある。そのときは、一方の親は「会わないほうが良い」などと言わず、会わせる努力をしてやるべきである。ある年齢に達した子が、別れた親に会って何かが見え、何かを感じることは、会わないよりもずっと良いことなのだから。

そして、離婚したばかりの人で、まだ子どもが小さい人は、子どもが思春期になったら必ず「なぜ別れにいたったか」との理由を問いかける日が来るということを胸に留めておいてほしい。そして、子どもはそこから親の選んだ離婚という生き方を子ども自身の心で再びなぞる苦しさを、体験するだろうという覚悟を持つことである。

それは決して恐れることではなく、その日まで、育児を一人で頑張ってきた親、子どもを愛し、一生懸命生きてきた親の姿を、子どもの心に刻印できるよう、自分の人生を誠実に生きていれば良いのである。親が自分の人生を一生懸命に誠実に生きていれば、子どもは必ず、そんな親を理解し、誇りに思う日が来る。働きながら一人で親をするのは、並大抵ではない苦労があるが、心がけて欲しいのは、子どもの前では努力して「職場の愚痴は言わぬこと」である。親の苦労話、怨みっぽい会話は、子どもの先の人生への希望や肯定感を消失させる。

「職場でこんな良いことがあった」「人に感謝された」・・・・という話題を積極的に子どもへの話題に選んで欲しい。子どもの心が前向きになる。子どもに人生への希望を抱かせるのは大人の義務と言っても良い。

そして別れた相手の悪口は言わぬこと。また「うちは父子（母子）家庭だから、何かと寂しい思いをさせていると思う」とか「すまない」という類のコトバを、子どもに繰り返さぬことだ。子どもは、そんなコトバのシャワーを浴びると「ボクは（ワタシは）可哀相な子なのだ」ということになる。言うのならば「よそは両親揃って親をやっている。ウチは一人で二人分の能力がある親なのだから、大船に乗っているキミは幸せなのだ！」といったプラスの発想で、現実に肯定感を与えるコトバを。

私はよく講演先の控室などで「片親なので、子どもについては心配ばかりしています」といった訴えを聞くと、こう言うことにしている。「だからこそ、二人分の信頼を子どもに寄せて育てて欲しい」と。

子に残す財産は誠実な生き方

一人で子どもを育てているということは、愛情も、信頼も〇・五になるということではない。愛情も信頼も二倍になるということである。その気構えで、わが子と向き合えばいいのだ。そうすれば、育てていく気力も三倍、四倍になり、親の内から湧いてくる。そうしなければ、子どもは育っていかないし、親の側も「シングルで育てる甲斐が無い」というものだ。

シングルの親のもとで家庭生活を営んでいく子たちは、同年の子に較べ人生について、また家について、人間の心というものについて、そして生活というものについて、否応無く多角的な視点から考えることになり、複雑で深い物の見方も身につく。人間や人生についての洞察力も鋭くなる。こうした部分を、親は上手に育て、内面の豊かな子へと導いていきたいものである。

シングルの親に限ったことではないが、親が自分の人生に納得し、「これでよし！」と生き生き、堂々と歩いていれば、子どもは賢い良い子に育つ。親が子に手渡す最も大きいものは百の理論、説得よりも、現実に自身の生き方、生きる姿を通して見せる「人生への誠実さ」である。自分の人生から逃げず、与えられた状況をしっかりと生き抜く、誠実な姿だけが、子どもの生涯に渡る財産となる。

多くの取材を通して私の得た実感である。

浜文子先生が執筆された本

「おばあちゃんの隣りで」（筑摩書房）

昭和という時代を背景にくり広げられた暮らしの周辺を少女の目を通して描いた一冊。私達が忘れかけている日本人の心の風景がある。NHKラジオ「私の本棚」でアンコール放送されたもの。

「祝・育児」（小学館）

人生で祝誕生、祝入学、等々祝いの対象とされる出来事は多いが「育児」は誰も祝ってはくれない。だから「祝・育児」というタイトルでとの著者の思い。世代を超えた母親と家庭の役割が分かる。